

「わたしの教育記録」 入選作品発表！

## 知的障がいのある生徒の発表会

# 「人生の振り返りと将来に向けてのステップ」

ICTを活用した発表会の実践報告

大阪府立寝屋川支援学校教諭 森脇 啓仁

### 1. はじめに

私は、本校に赴任して本年度で11年目を迎え、高等部教員としてまた情報教育部長として、授業ではおもに情報教育を担当している。昨年度までの3年間を高等部1年から3年まで持ち上がり、本年3月には卒業生を送り出したところであるが、3年間を持ち上がると、いつも思うことがある。それは、多くの生徒が「自分自身に向き合えない」「自信がもてない」「社会で生きていくための力が明らかに不足している」とである。しかし、本校卒業後は企業就労（障がい者雇用）、障がい者職業能力開発校、障がい福祉サービス事業所（作業所）のいずれかに行くこととなる。つまり、卒業後は社会に出ていくのである。また、職業能

力開発校や福祉サービス事業所へ行ったとしても、近い将来には企業就労する生徒も多くいる。「学校生活から社会生活への移行」「企業就労」などという人生の大きな節目を迎えるのときに、人生を振り返り、将来の自身の姿を思い浮かべる「発表会」を行い、成功体験を味わわせることが必要だと感じたのである。

いま一度自分自身のこれまでの人生を振り返り、現在の自身の置かれた状況を理解し、また将来の自身の姿を思い浮かべ、これらをまとめてプレゼンテーションを作成して多くの人前で発表することで、自信につながるのではないかと考えた。さらには3年計画で系統立ててICT教育を行ってきたことから、発表会までの過程の中でICTをより効果的に活用できるよう工夫した次第である。

### 2. 実践の概要

知的障がいのある生徒が自身の過去を振り返り、現在の姿を直視し、さらに将来の姿を考えることはかなり難しい。たとえそれらが記述できたとしても、多くの人前でそれを発表するとなると、発表するということ経験がほとんどない生徒にとっては至難の業である。この実践は、これまで取り組んできたICT教育3年計画の集大成として行ったものである。

この実践は昨年度の本校高等部3年生の知的障がい軽度から中度である生徒を対象に、平成25年4月から7月にかけて、つまり第1学期間に集中して行った。「そんなことはできない」「無理だ」という声が多数上がることを予想していたのだが、実

表1 / 3つのステップ

ステップ	内容	記述先
第1ステップ 自己評価	「自分のよいところ／わるいところ」を自身で記述する。	Word
第2ステップ 友達評価	「〇〇さんのよいところ」というように、友達を評価する。	メール
第3ステップ 自己分析	「自慢できること」「苦労したこと」「挫折したこと」など13項目を自身で記述する。	紙 (プリント)

実践することを伝えたときの生徒個々の真剣な表情を私は忘れることができない。それは、「自分自身に向き合わなければならぬ場面がとうとうやってきた」「この機会を逃すことなく一度向き合ってみよう」という一種の覚悟のような表情が見られたのである。

実践にあたり、プレゼンテーション原稿のもととなる資料づくりを3つのステップに分けることとした(表1参照)。第1ステップでは、「自分のよいところ／わるいところ」を自身で記述する。次に第2ステップでは、「〇〇さんのよいところ」というように、友達を評価する。そして第3ステップでは、「これまでの人生を振り返る」ことをテーマとして、「自慢できること」「苦労したこと」「挫折したこと」など13項目

表2 / 友達からの評価例

生徒名	友達からの評価
男子生徒A	みんなを笑わせてくれる いつもがんばっている 元気 優しい 素直 まじめ おもしろい 話したら話し返してくれる おとなしい すぐに行動してくれる がんばりがある

を自身で記述するのである。第1ステップではWordを使い、自由に記述させた。また、第2ステップでの友達による評価では生徒の匿名性を保つために、つまり誰から評価されているのかを伏せるために、メールで、まず私宛てに「〇〇さんのよいところは、△△です」「□□さんの長所は、××です」などというように多くの友達の評価をメール上で入力、送信させた。

そして、私がすべてのメールを生徒ごとにまとめ、今度は私から各生徒へ「友達からあなたへこのような評価がきています」と一人あたり10件以上もの友達からの評価をメール送信して知らせた。表2が実際に各生徒へメール送信して知らせた友達からの評価の一部である。表2の生徒名は、「6. 生徒の作ったスライドの考察」の(1)男子生

徒Aの生徒名と一致している。そして、第3ステップではより自分自身に向き合わせるために、一転して紙ベースで記述させた。これら3つのステップでの記述やメール等を資料として、いよいよプレゼンテーション原稿の作成である。プレゼンテーション原稿はPowerPointで、スライドは4枚作成するように指示した。(表3 / 「4枚のスライド」略)

スライド1枚目は「タイトルと名前」。タイトルは発表会に見合うものを自由に記述させた。2枚目は「過去」と題して自身の過去の姿を記述する。3枚目は「現在」と題して現在の姿を記述する。そして4枚目は「将来」と題して将来の姿や目標、夢などを記述するのである。

ここでのポイントは、私自身が「一切、手を加えない」「口出ししない」「つまり生徒が書いたありのままを受けとめる」ことである。これらを記述する上で生徒には様々な葛藤が生じ、ときには自暴自棄な言葉を発するなど紆余曲折があった。しかし、紆余曲折は当然のことである。「いじめられたことがある」「不登校だった」「勉強ができない・わからない」「人とうまくコミュニケーションがとれない」等々、これま

での人生の中での辛かったことがその根底にあるからである。

さらに、卒業を控え、「支え合った仲間と別れることへの不安」や「将来についての不安」もあるだろう。本校高等部入学後は登校することや学習することの喜びを覚え、コミュニケーションの方法を徐々に理解するなど、のびのびと学校生活を謳歌する生徒がほとんどである。しかし、次はこれまでに経験したことがない「社会人」という大きなステージが待ち構えている。

そこで、過去の姿から逃げ出すことなく振り返り、直視し、将来に向けての足がかりにしてほしいという思いから、3年間取り組んできたICT教育のまとめとICTの強みを存分に生かしてプレゼンテーション原稿を作成し、多くの人の前でこれを発表するという学校生活の集大成として、この実践を行ったのである。

### 3. 工夫とねらい

この実践は、高等部3年生の生徒21名を対象に行った。「学校生活から社会生活への移行」という人生の大きな節目を迎えるこのときに、人生を振り返り、将来の自身

の姿を思い浮かべるこの発表会が必要だと感じたのである。また、3年間継続してICT教育を行ってきたことから、発表会までの過程の中でICTを効果的に活用できるようにした。

実践にあたり、プレゼンテーション原稿である「過去」「現在」「将来」のスライド作りと発表会の2つに重点を置いた。まず、生徒自身もつ「自分のありのままをさらけ出そう」というモチベーションが必要不可欠である。そのために、第1から第3ステップで自己評価、友達評価、そして自身の研究により知的障がいのある生徒が、自己分析するときに考えやすい13項目(表4)を使い、生徒自身に自己分析させた。これらをWordやメールで入力したり、紙ベースで記述させたりして具体性とメリハリをつけた授業展開で生徒のモチベーシ

表4 / 自己分析するための13項目

- |               |
|---------------|
| 1 「がんばったこと」   |
| 2 「取り組んできたこと」 |
| 3 「自慢できること」   |
| 4 「感動したこと」    |
| 5 「やり遂げたこと」   |
| 6 「打ち込んだこと」   |
| 7 「自分を変えたこと」  |
| 8 「自分らしいこと」   |
| 9 「苦勞したこと」    |
| 10 「失敗したこと」   |
| 11 「挫折したこと」   |
| 12 「いやになったこと」 |
| 13 「困ったこと」    |

ョンを高めてきた。さらに、発表会までに発表原稿を作り、PowerPointの操作方法や発表方法の研究、そして発表会のリハーサルを繰り返すなどのプレゼンテーションスキルの向上を目指し、余裕をもって堂々と発表できる姿勢を学び、成功体験に結び付けようとした。

### 4. ICTの活用

高等部1学年次に21名すべての生徒にアカウントを発行し、幅広いICT教育を展開してきた。当然のことながら、知的障がいのある生徒へのICT教育にあたり、生徒の発達段階を見極めつつ授業を行った。これらの学習は単にICTが利用できるようにするためのものではなく、将来の社会生活を見据えてICTを主体的に利活用できるための学習とした。そのまとめとしてこの実践である。

実践にあたり、まずは第1ステップでの自己評価の入力である。Word入力は慣れたものでスムーズだった。第2ステップでの友達評価はWebメールでの送信である。これまでに授業内で何度もメールの送受信を行っているので滞りなくできた。併せて、

友達からの評価メールを受け取った生徒全員は、「自分は友達からこんなふうに思われているんだ」と嬉しさや満足感を味わうことができた。第3ステップでは、一旦コンピュータ教室から離れ、普通教室においてプリントに記述させた。

第1から第3ステップを経て、次はプレゼンテーション原稿の作成である。原稿はPowerPointで作成したが、まずPowerPointの基礎から授業を行った。アニメーションの設定やスライドの操作はスムーズであった。しかし、課題はパソコンの操作ではなく、プレゼンテーション原稿に生徒自身があるのままと記述できるかどうかである。3年間通してICT教育を受けてきた生徒は自身に真正面から向き合い、ICTの強みを存分に生かし「パソコンだから書ける」とどんどん記述することができた。

## 5. 発表会とその成果

第1ステップでの自己評価で「自分のわるいところはいくらでもあるのに、よいところはひとつもない」という生徒。またはその逆で自身の弱点を直視できない生徒。第3ステップでの人生の振り返りでも

同様に、「失敗したこと」や「挫折したこと」はいくらでも記述できるのに、「自慢できること」「やり遂げたこと」はまったく記述できない生徒。またはその逆。この実践を通して、「自分自身に向き合う姿勢」の大切さを知り、不安や苦勞、そして自信や喜びなどすべてを友達と分かち合い、そして人生の大きな節目を迎えてほしいと取り組んできた。

この間、紆余曲折はあったが、誰一人として逃げ出すことなく、過去・現在の姿を直視し、将来の姿を意識した原稿を仕上げることができた。それは、将来を強く意識した生徒一人ひとりの行動力そのものである。併せて、原稿の作成にはICTの強みを存分に生かすことができた。「障がいがあるからパソコンが使えない」ではなく、「障がいがあるからこそパソコンを便利に活用する」ことを柱とし、3年間継続してICT教育を展開してきた。ICTに親しんだ生徒は、パソコンを通してプレゼンテーション原稿をすらすらと作るのである。平成25年7月17日、発表会当日を迎えた。おそらく、生徒のこれまでの人生で初めての経験である。司会である私が、発表する生徒を順に呼び、呼ばれた生徒は発表卓ま

で移動して、立位のままマイクを握り自己紹介をした。そして、手元にあるパソコンを操作しながら発表を行った。(中略)  
発表会を終えた生徒の表情には安堵感が見られたが、同時に達成感と自信に満ち溢れた様子であった。

## 6. 生徒の作ったスライドの考察

堂々と発表する生徒の姿に感動を覚えたが、同時に生徒自身が作成したスライドに生徒それぞれの思いが凝縮されていることに注目したい。なお、スライド1のタイトルの下段には名前が記載されているが、その部分は削除してある。

### (1) 男子生徒A

生徒Aは本校卒業後、就労移行事業所(作業所)を利用することとなり、近い将来の就労を目指す(次ページのスライド図参照)。この生徒は小学校2年生の時に脳梗塞を起し、右半身が不自由になった。そのことは担任をしている私は当然のこととして知ってはいたが、この生徒本人の口からは一度も聞いたことがない。しかし、このスライド2には過去の出来事として受け止め、



### 男子生徒Aのスライド

<p><b>現在</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校を休まなくなった</li> <li>・就職活動が始まるから</li> </ul> <p>スライド3</p>	<p><b>将来に向けて</b></p> <p>スライド1</p>
<p><b>将来</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お金をためて親孝行がしたいです</li> <li>・安定した職業に就きたいです</li> <li>・給料は半分使って半分貯める</li> <li>・やすい賃金のところに住みたい</li> </ul> <p>スライド4</p>	<p><b>過去</b></p> <p>小学校2年で脳に病気をあって、右の手足が自由に動かなかった。</p> <p>スライド2</p>

記述できているのである。案外シンプルなスライドではあるが、この出来事にすべてが凝縮されているのであろう。また、この生徒は本校高等部第1・2学年次には長期欠席生徒であった。しかし、第3学年になるとほとんど欠席することがなくなった。それは、進路を決める大切な学年であるとして理解しての行動であると、スライド3より感じ取ることが出来る。スライド4には「親孝行がしたい」との記述がある。脳梗塞を起してから、両親には助けってもらったという思いが強いのであろう。自身が働いてお

金をため、恩返しがしたいとの思いが綴られている。

ちなみに、この「親孝行」という言葉が今回の発表会でのキーワードの一つになっていることに注目したい。私はこの実践中に、決して「親孝行しなさい」と発言したことはないのであるが、生徒自身の言葉として、多くの生徒が「親孝行したい」と記述しているのである。

### (2) 女子生徒B

この生徒は本校卒業後、介護補助職として企業就労した生徒である。中学校時代に教室に入ることができず、不登校となった。人間不信に陥ったようである。スライド2には過去の様々な辛い出来事が記述されている。あまりにも辛かったのだろうと思われるが、今だからこそそれらに真正面から向き合っていることが読み取れる。そして、スライド3から、本校高等部に入学後は前向きに生きていくことが楽しいと思えるようになったことがよくわかる。確かに、この生徒は生徒会に立候補して当選したり、運動会では応援団長として活躍したりするなど、学校生活を謳歌していたように思われる。スライド4では、夢の実現とともに

家庭を築き、子育てを経験したいとの思いが書かれている。これまで両親を悩ませたとの思いから、親孝行をしたいとの記述がある。(女子生徒Bのスライド図略)

### (3) 男子生徒C

この生徒は本校卒業後、食品業界に企業就労した生徒である。小学校、中学校時代に友達ができず、寂しい学校生活を送っていたことがスライド2から読み取れる。「親を信じられなくなったときもあった」との言葉から、この間に両親とも様々なやりとりがあったのだろうと推測できる。

一方、スライド3より、本校高等部入学後は多くの友達ができ、楽しい日々を過ごしたようである。そして、スライド4より、仕事に楽しみを見いだしたいことや、これまで支えてくれた両親に親孝行をしたいとの言葉が見られ、両親に対して感謝している様子がうかがえる。(男子生徒Cのスライド図略)

## 7. この実践を広げる活動

発表会を行った生徒自身そして私自身の達成感と満足感、そして発表会を見聞きし

た多くの生徒や本校教員の反響をもとに、発表会当日に見ることのできなかつた本校教員にはデジタルビデオカメラで撮影したディスクを貸し出した。また、校内の研修会でも実践報告を行った。さらに、この実践を今回限りにせず、他校を含め多くの教員に知ってもらいたいとの思いから、3回の実践発表を行った。(中略)

## 8. おわりに

知的障がいのある生徒の多くは、学校と家庭、および家庭の近隣を行き来するだけの、ある意味で狭い空間の中で生活している。そして、生徒のほぼ全員が18歳になれば、突然社会へ出ていかなければならないのが現実である。社会へ出たものの、社会生活にうまく適応できずリタイアする卒業生も多い。企業就労しても離職を繰り返す卒業生も決して珍しくはない。

このような現実の中で、知的障がいのある生徒が社会で生きていける人間となるために、社会生活を送る前に学校生活や家庭生活の中で、「人前で話す経験を増やす」「達成感、満足感、成功体験をできるだけ多く味わう」「相手を思いやる気持ち、辛いこ

とや嬉しいことを共有できる姿勢をもつ」ことが必要だと、日々感じながら私は教育を行っている。

これらを実現させるための一つの手段として、ICTはその強みを存分に發揮してくれる。当然のことながら、長期の計画を立案し系統立てたICT教育を実践しなければならず、知的障がいのある生徒に対する教育として理解面も含め多くの難しい側面もある。しかし、ICTに興味関心があるのは知的障がいの有無とは関係がない。ICTを有効的に活用することで、知的障がいのある生徒の気持ちを引き出し、過去の自分の姿から逃げない、そして将来に向かって歩んでいく自分の姿を想像させることができる。

これらを発表することで過去・現在・将来の姿を友達と共有し合い、成功体験を味わい、次への一歩を踏み出すことができるのである。学校教育におけるICTの活用において、趣味や楽しみの領域とは切り離して取り組まなければならないのは明白であるが、ICTを活用できる私たちが、アイデアをもってICTを活用し、真の意味での生きていける社会人を育てることができないのではないだろうか。(後略)

## 受賞の言葉

大阪府立覆屋川支援学校教諭

森脇 啓仁



「生徒の将来の幸せ」は私たち教員が共通してもっている願いであり、この願いをかなえるために日々の授業や生徒指導等に奮闘しているところです。

一方、知的障がいのある生徒のほとんどが18歳になると学生生活を終え、突然社会人として生きていかななくてはなりません。社会生活での道は苦勞の連続であり、多くの卒業生が悪戦苦闘している姿を私自身も見てきました。

「学校生活から社会生活への移行」という人生の大きな節目を迎える生徒に、ICTを活用した発表会を行うことで、少しでも自信をもって社会へ羽ばたいてほしいとの思いから、1学期間という長い時間を費やして今回の実践を行った次第です。

発表会までの過程を実践記録としてまとめ、評価いただけたことで実践の振り返りと同時に、この取り組みを今後も続けたい、そして「生徒の将来の幸せ」を常に意識した授業を今後も追求しようとの思いが、より一層強くなりました。

このたびは本当にありがとうございました。